

戦争を翻訳する自然：ワーズワスとターナーにおける崇高と政治の詩学

宮崎 真弓

はじめに

ナポレオン戦争期のイギリス社会において、軍事的脅威と政治的不安が拡大する中、文学や芸術はいかにしてその暴力を語り得たのだろうか。本発表は、ウィリアム・ワーズワスとジョゼフ・マロウド・ウィリアム・ターナーにおける自然の表象が、同時代の政治的出来事を間接的に翻訳する美学的装置として機能した過程を検証するものである。

1980年代以降の新歴史主義の台頭に伴い、ワーズワスのテキストを歴史的文脈に位置づける研究は盛んに行われてきた。サイモン・ベインブリッジは、ロマン派詩人とナポレオンの力学的対話を論じ、フィリップ・ショウは戦時下の文化的表象の複雑さを鋭く分析している。他方、ターナー研究においては、ジェームズ・D・ハーバートやリン・R・マッテソンが、画面に潜む政治力学や人間の野心の相対化を指摘してきた。しかし、詩と絵画というメディアの差異を越え、両者を同一の政治的・美学的問題圏において横断的に比較する試みは未だ十分ではない。本発表では、伝統的な崇高の概念が、戦時下においていかなる政治的・倫理的機能を担ったのかを明らかにする。

1. バークとワーズワスによる崇高の解釈

本発表の理論的枠組みとして、まずエドマンド・バークの崇高論を確認する。バークは *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful* (1757) において、崇高を自己保存本能や恐怖、死への不安と結びつけ、それが身体的なメカニズムに基づくとして定義した (Burke 58)。対象が圧倒的な巨大さや力をもって迫るとき、主体が安全な距離を保っている場合にのみ、その恐怖は崇高の情念へと変換される。これに対し、ワーズワスはバークの枠組みを継承しつつも、認識の力点を外界の対象から人間の内面へと移行させた。未完の美学論文 “The Sublime and the Beautiful” (1811-12) において、ワーズワスは、従来の議論が外部の対象の属性に固執し、主体の「精神そのもの、およびそれが作用する法則」を軽視してきたと批判する (Wordsworth 355)。彼にとっての崇高とは、受動的な恐怖反応ではなく、圧倒的な外的な力に直面した際にも、自らの「理性」と「道徳律」(moral-law) を能動的に発動させ、「精神の静謐」(repose) を勝ち取るという、主体的な精神の自律プロセスなのである。

2. ワーズワス：国家の時間と自然の時間

こうした独自の崇高論は、詩作においていかに実践されたか。 *Poems in Two Volumes* (1807) に収録された “Character of the Happy Warrior” (1806年執筆) を例に挙げる。理想の兵士の条件を問う本作において、兵士は Pain, Fear, Bloodshed という、バーク的な恐怖の源泉に直面する。しかし、ワーズワスはこれらを単に回避すべき脅威とせず、兵士が引き受けるべき運命とした上で、“Controls them and subdues, transmutes, bereaves / Of their bad influence, and their good receives:” (lines 17-18) と謳う。ここで兵士は、戦場の凄惨な現実には呑み込まれることなく、それを自らの内面的な規律へと変容させる。激動の只中にありながら、「魂の機軸」(master-bias) を「穏やかな情景」(gentle scenes) に据え置くその姿は、道徳律によって勝ち取られた精神の静謐の具現化にほかならない。この倫理的空間は、地質学的な持続を特徴とする自然の時間と同調している。戦勝という一過性の出来事を記念碑として固定しようとする国家の時間に対し、ワーズワスの兵士は、名を残さずに死ぬ可能性をも受け入れ、真の慰めを歴史的記憶ではなく「自己とその理念」(himself and his cause) に見出す (line 79)。国家的英雄神話を退け、戦意高揚の熱狂を道徳的永続性へと移行させる点に、ワーズワスの政治的レジスタンスが存在する。

3. ターナー：暴力を裁く主体としての自然

同時代の画家ターナーは、この国家的英雄神話の解体を、より動的かつ視覚的な言語で実践した。 *Snow Storm: Hannibal and his Army Crossing the Alps* (1812) において、画面の大半を支配するのは歴史的英雄ハンニバルではなく、巨大な黒い雪嵐の渦である。ハンニバル＝ナポレオンという同時代的な暗喩を踏まえるならば、ここでは自然の猛威が帝国の傲慢に対する報復として機能している。前景の拡大図を見ても、英雄の姿は点景化され、ほとんど視認できない。代わりに描かれるのは、襲撃に晒される兵士や捕虜の凄惨な略奪光景である。ナポレオンの専属画家的立場であったジャック＝ルイ・ダヴィッドが、《Bonaparte Franchissant le Grand Saint-Bernard》(1800)

で描いたような、自然を従属的な背景とする英雄礼賛に対し、ターナーは自然を人間の野心を飲み込む主体へと逆転させた。マッテソンがこれを帝國的移動への抵抗として読み解いたように、ターナーの光と嵐は、軍事的行為の空虚さを暴き出し、歴史を裁く側に立つ崇高の視覚的翻訳であると言える。

4. 1817年のワーズワスとターナーの共鳴：古典的モチーフを媒介とした普遍化

本発表が最も注目するのは、ワーテルローの戦後直後にあたる1817年における、両者の表現の奇妙な一致である。直接の交渉がないにもかかわらず、両者は古代のイメージを重ね合わせることで、同時代の政治的熱狂を相対化する戦略をとった。ワーズワスの“Ode: The Pass of Kirkstone” (1817) では、カークストーン峠の荒涼たる岩石が、ドルイドの祭壇やエジプトの記念碑に擬せられ、それらが四千年という時間の視線の前に等しく並べられる。ナポレオンがエジプト遠征時に帝國的正統性の修辞として用いた四千年という言葉、ワーズワスは自然の悠久の時間へと奪取し、人間の矮小化へと反転させている。また、かつて峠を越えたローマ軍という帝国の時間を、さらに古い自然の目の持続の内部に包摂することで、同時代のナポレオン戦争をも人類史の反復的な興亡の一局面にすぎないものとして普遍化する。特筆すべきは第四連における、頂上の「荒涼たる領域」(desolate Domain) から眼下の「耕された平野」(cultur'd Plain) への歩行を伴う下降である。直線的で暴力的なローマ軍の移動に対し、眼下の共同体で見出されるのは、循環的な「日々の巡り」(daily round) を生きる人々の労働と情愛の連鎖である。地質学的時間から生活者の時間への生還を経て、詩人は“Thy lot, O man, is good, thy portion fair!” (line 85) という力強い人間信頼へと着地する。帝国の神話を解体したのち、ありふれた日常の尊さを再発見するこの構造こそ、ワーズワスの崇高論の帰結である。

ワーズワスによるこの時間的相対化の戦略を、ターナーは同年の *The Field of Waterloo* (1817) で鮮やかに共有している。本作はイギリス側の戦勝祝祭の視覚化を拒絶し、夜の闇、散乱する無数の遺体、そして古代ローマの遺跡のように不気味に照らされるウーグモン農場を描き出す。ハーバートが指摘するように、画面を照らす松明の光は歴史をめぐる不確実な証言であり、出来事を確定させない揺らぐ記憶の媒体として機能する。さらに、イギリス兵とフランス兵の遺体が馬の屍と区別なく絡み合い、肉体の輪郭が溶解している表現は、バークの説く崇高の条件「無限性」と「画一性」を死の均質化する力として視覚化したものである。敵味方の色彩的識別を消去し、遺族の嘆きを古典悲劇の図像へと昇華させることで、ターナーはワーテルローという同時代の事件を、普遍的な戦争の悲劇へと翻訳してみせた。この歴史の究極的な相対化の姿勢は、後年の *War. The Exile and the Rock Limpet* (1842) において、セントヘレナ島のナポレオンを足元の小さな貝殻と対比させ、自然の悠久の持続の前に置く構図へと完全に結晶化することになる。

5. 結論

以上のように、ワーズワスとターナーは、バークの崇高の枠組みを独自に拡張・変容させながら、ナポレオン戦争という未曾有の暴力を「自然の言語」へと翻訳した。両者に共通するのは、軍事的栄光によって歴史の永続性を装う国家の時間を解体し、それを悠久の持続である自然の時間へと移行させる美学的戦略である。ワーズワスの幸福な兵士が嵐の只中で道徳律に安らぎ(repose)を見出し、峠を下って生活者の情愛に希望を見出したように、ターナーの *Waterloo* もまた、国籍を超えて絡み合う遺体と廃墟の静寂によって戦勝讃歌を拒絶し、観る者を倫理的省察の repose へと導く。詩と絵画という異なるメディアを超えて同時期に達成されたこの横断的な共鳴こそ、ロマン派の芸術が到達した政治的・倫理的批評の核心にほかならない。

引用文献

- Bainbridge, Simon. *Napoleon and English Romanticism*. Cambridge UP, 1995.
- Burke, Edmund. *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*. Edited by James T. Boulton, U of Notre Dame P, 1968.
- Herbert, James D. *Our Distance from God: Adventure and Anxiety in French High Romantic Painting*. U of California P, 2008.
- Matteson, Lynn R. "Turner's Snow Storm: Hannibal and his Army Crossing the Alps." *The Art Bulletin*, vol. 62, no. 2, 1980, pp. 329–41.
- Shaw, Philip. *Waterloo and the Romantic Imagination*. Palgrave Macmillan, 2002.
- Wordsworth, William. "The Sublime and the Beautiful." *The Prose Works of William Wordsworth*. Edited by W. J. B. Owen and J. W. Smyser, vol. 2, Oxford UP, 1974, pp. 349–60.
- . *The Poetical Works of William Wordsworth*. Edited by E. de Selincourt and Helen Darbishire, vol. 4, Oxford UP, 1958.